A BRAND NEW CHAPTER @KOCHI

TOSABUSHI

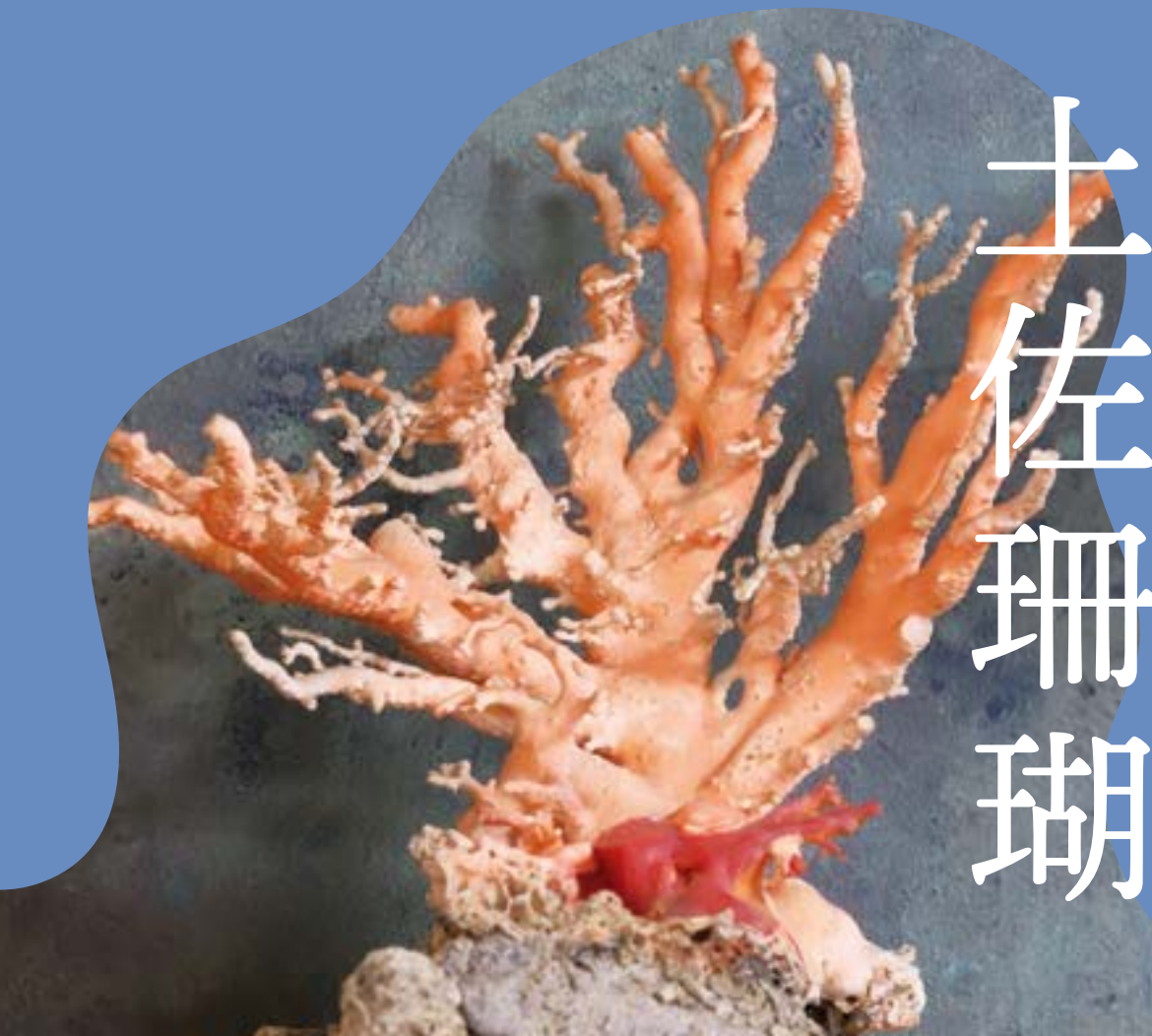
とさぶし

高知県は、ひとつの大家族やき。
高知家

No 27

kochi 再発見 discovery 新発見

TAKE FREE



伝説の土佐珊瑚（サンゴ）

神様がやどした海の宝石

伝説の土佐珊瑚（サンゴ）

宝石サンゴの主産地である「土佐サンゴ」の歴史は古く江戸時代に遡る。
当時、土佐の海で宝石サンゴが採れることは秘め事とされていた。
そして時は流れ令和、その文化は今もなお継承され、国際的評価を得るまでに成長。
しかし一方で、深海に生きる宝石サンゴの全貌は未だベールに包まれている。
謎多きサンゴの世界を読み解く。

Contents

特集

神様がやどした海の宝石
伝説の土佐珊瑚 …… P03
「宝石珊瑚」にまつわる神話と真実 …… P04
謎多き「土佐珊瑚」の軌跡をたどる …… P06
生命がやどる「宝石珊瑚」の神秘 …… P08
職人として功績を残した「土佐珊瑚の匠」 …… P10
「土佐珊瑚」を未来へつなぐ若手職人 …… P12

連載

絶景にて人と出会う …… P14
土佐が語り継ぐ祭 …… P16
日曜日のTOSAレシピ …… P18
プライムトーク …… P20
集落を訪ねて～大学生がゆく～ …… P22
読者プレゼント …… P23

とさぶし27号の登場人物

幡多地域で「海辺の日曜市」を開催する実行委員の皆さん

ダイバー兼水中フォトグラファーとして活躍する福井宣博さん

南国市でサンゴを使用した「根付」などを作る森謙次さん

海底の生物環境を研究する「海辺の自然史研究舎」代表・中地シュウさん

ひょうたんランプを作る「Hyotan MAGIC」の小泉斉さん

「百万遍祭」を主催する土佐町南川地区長の竹政敬生さん

サンゴ工芸彫刻の若手職人「Gallery蓮Ren」の鎌倉悠さん

サンゴ一筋で職人技術を編み出してきた「前川珊瑚工房」の前川泰山さん

「農家食堂 cafe イチョウノキ」で活躍中の嶋本隆男さん

「四万十大正あゆまつり」の実行委員長を務める市川敏英さん

「（株）木内工芸」でサンゴの加工を行う西森恵美さんと西本佳那子さん

サンゴメーカー「KAWAMURA」の珊瑚加工職人の谷内克臣さん

「宝石珊瑚（サンゴ）」にまつわる 神話と真実

神話

全国に誇る土佐の伝統文化として
古くより尊いものとされてきた宝石サンゴだが、
そのルーツは地中海。遥か昔、ヨーロッパよりシルクロードを経て、
数々の神話とともに日本へ渡来したと伝えられている。

神 ヨーロッパでは王侯貴族の宝物

もともと地中海で採取されていた宝石サンゴは、ヨーロッパで王侯貴族の宝物とされ、それがキリスト教国に浸透。その後、仏教の伝来とともに日本に渡来したと伝えられている。

神 仏教の経典で極楽浄土を飾る

仏教思想が極楽浄土の様子を伝えた中に、極楽は「七宝」で飾られていると表現され、「七宝」の中に金、銀、瑠璃などと並び、サンゴが含まれていたことも有名な神話のひとつ。

神 幸福や魔除けのシンボル

アカサンゴは血液の色を連想させることから、世界各地で人を守る霊力があると信じられてきた。その例として、幼児の手首にサンゴの数珠をする風習が高知県西南地域に残されている。

神 おとぎ話で富の象徴

「桃太郎」では鬼退治をした褒美として「金、銀、サンゴ、綾錦」が描かれ、「浦島太郎」に登場する竜宮城の入口にもサンゴの茂みが描かれているほど、古くより宝物とされてきた。

●さんごの海 土佐珊瑚の文化と歴史　著者／庄境邦雄　発行／高知新聞社

真実

世界有数の資源として、また高価な国際商品としても
世界的評価を得る宝石サンゴにおいて、世界トップクラスの評価を得る土佐サンゴ。
歴史、生産量、技術…　その全てが実力を語る。

真 発祥の地は室戸沖

宝石サンゴが日本で初めて採取されたのは、1812年、室戸岬津呂の沿岸と伝えられており、サンゴ漁の歴史は高知県が全国で最も古く180年以上に渡る。

真 高知は主産地

宝石サンゴの漁獲量は、年によりばらつきがあるものの、高知県が約9割を占める主産地であり、特に高価な「血赤サンゴ」の原木となるアカサンゴが多く採れることでも有名。

真 高知は加工技術も随一

日本の宝石サンゴ加工を担うのは、約8割が高知県内の業者。中には、スーパーブランドから高評価を得るメーカーも存在する。サンゴ工芸のけん引役としても多くの成果をあげている。

真 高知は国内における流通拠点

国内で採れる宝石サンゴは、サンゴ業者93社が登録し運営する「日本珊瑚商工協同組合」の原木オークションを経て世界へと流通する。その全国の拠点となるのが、ここ高知!

参考資料／●宝石珊瑚の魅力 品質と見分け方と価値の評価基準　著者／高知県工業振興課　発行／㈱高知県商品計画機構

謎多き「土佐珊瑚（サンゴ）」の軌跡をたどる

今や「宝石サンゴ大国」として世界的シェアを持つ土佐サンゴだが、
その歴史はあまりにも知られていない。サンゴにまつわる伝説は知れば知るほど奥が深い。

参考資料／●宝石珊瑚の魅力 品質と見分け方と価値の評価基準 著者／高知県工業振興課 発行／㈱高知県商品計画機構 ●さんごの海 土佐珊瑚の文化と歴史 著者／庄境邦雄 発行／高知新聞社

童話「お月さん ももいろ」が伝えるサンゴの軌跡

土佐におけるサンゴの軌跡をたどる中、一冊の絵本に出会った。それは、1973年、ポプラ社より発行された「お月さん ももいろ」という童話。そこには、富と欲情が交差する不条理な古き時代のしきたりが描かれており、そのストーリーから当時のサンゴの価値が読み取れる。物語の故郷は幡多郡大月町の旧月灘村。ここの海には古くからサンゴが眠ると知られていた。しかし当時、サンゴは非常に希少性の高い宝石。土佐藩が厳重に採取を禁止し、その所在を口にすることを固く禁じられ、採ること、拾うこと、持つこと、語ることさえも許されなかった時代。この海でサンゴが取れることは、秘め事とされていた。

この物語は「おりの」という少女が、浜辺に打ち寄せられたサンゴを拾ったことから始まる。おりのは、そのサンゴを病床のおじいちゃんの命を救う特効薬をくれた、与吉という山の若者に渡してしまう。それが浦奉行に知れ渡り…、最後にはそのモモイロサンゴを手にした2人がともに命を落としてしまうという、切なく悲しい恋物語。こうしたサンゴにまつわる物語は、いくつかの地域に残されているという。

大月町渭南海岸に残る「さんご採取発祥地記念像」には、口をとざされた漁師や子どもたちによって唄いつがれた童謡「♪お月さんももいろ だれんいうた あまんいうた あまのくちひきさけ♪」の唄とともに、サンゴを抱いた少女の像が建てられ、その歴史を今に伝えている。

大月町に残る「さんご採取発祥地記念像」の隣には、「土佐サンゴ発祥の地」と書かれた説明板が建ち、サンゴにまつわる歴史が綴られている。

1973年にポプラ社より発行された絵本「お月さん ももいろ」。文・松谷みよ子 絵・井口文秀

明治維新後、高知は世界に誇るサンゴ大国へ

明治維新後、「お月さん ももいろ」にも描かれた藩政の禁令が解かれると、高知の海域でサンゴ船による採取が盛んになり、高知のサンゴ漁は急速に発展。19世紀に入る頃には土佐湾沖に何百隻もの採取船が出漁し、土佐サンゴは全国から一躍脚光を浴びはじめた。そうして、カツオの一本釣り、マグロのはえなわ漁と並び、サンゴ漁は全国の先進県として、高知に大きな経済効果をもたらすまでに発展。買い付けには、サンゴジュエリーの生産が盛んなイタリアのバイヤーも訪れるようになるなど、日本における宝石サンゴ産業の中心地となっていた。その頃から「高知新聞の題字」の背景にはサンゴが描かれている。

また、魚介類が市場でセリにかけられるように、海で採れるサンゴもセリにかけられる。その入札が全国で最初に行なわれたのも、高知であり、現在でも日本で採取された宝石サンゴの原木はすべて高知の入札場に集まり、セリにかけられる。宝石サンゴの中でも最も希少価値が高いとされる「アカサンゴ」は、その漁獲量の多さからヨーロッパで「トサ」という別名で浸透していると、県内業者は胸をはる。一方でサンゴの加工技術も日本はトップレベル。その匠の技術を全国に広めた先人を多数輩出しているのもまた高知であり、その功績は華々しい。

宝石サンゴの中でも最も高価な「血赤サンゴ」。不透明で濃い赤色の宝石は唯一無二。神秘的な輝きを放つ。

明治40年代から使用されている高知新聞の題字。背景には、サンゴのイラストがあしらわれている。

世界でも有数の宝石サンゴの流通拠点として知られる日本。その主産地である高知県が世界に誇れる「宝石サンゴ大国」であることは、その長い歴史と、現在も高知を拠点に飛び交うサンゴの流通の多さが物語る。

Tosa Coral memo 1
土佐サンゴ入門
「サンゴ資料館」潜入レポート

「サンゴについて知りたい」そんな人にぜひ体感して欲しいのがこちら「宝石珊瑚資料館35の杜」。館内では「35のストーリーで綴る珊瑚の世界」と題し、サンゴの歴史や文化、生態系についてのパネルや資料が展示されている。また、宝石サンゴの原木を観られる展示スペースのほか、有名彫り師が手がけた世界有数の貴重な彫刻作品なども自由に見学ができ、一般の人でも気軽にサンゴの世界に触れられる。さらに、サンゴジュエリーの販売や、サンゴを自分で磨き上げて仕上げて作るペンダントトップや自由なデザインが楽しめるプレスレット作りの体験コーナーも。まだまだ知られていないサンゴの世界にいざ入門！

ナビゲーター
35の杜 代表取締役社長 近藤 健治さん

好きなサンゴを選び自分で磨いてネックレスに仕上げる体験コーナーも常設。(1個1000円・1500円)

幅5m・高さ2mの壁画は、全種類の宝石サンゴを使用したという世界最大サイズのサンゴアート。

150kgものサンゴを散りばめて作られた「ホワイトライオン」。本物がいるかのような迫力満点の存在感!

サンゴはそれぞれで色や形、大きさも様々。資料と実物を見比べながら学べるのは資料館ならではの楽しさ。

日本サンゴセンター 35の杜 高知市仁井田187-3 ☎088-847-3535

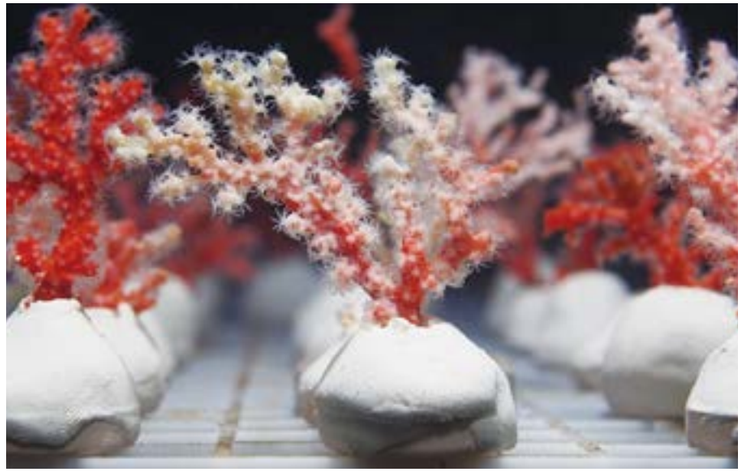
写真は全て、宝石珊瑚保護育成協議会提供

生命がやどる「宝石珊瑚（サンゴ）」の神秘

**土佐の黒潮がもたらした世界有数の土佐サンゴ。
人の手では到底届かない水深100mを超える深海で生きる
宝石サンゴの生態は謎が多く神秘に満ちている。**

「生き物としての宝石サンゴは、ほとんど知られていないことばかりですよ」。そう話すのは、大月町在住の研究者、中地シュウさん。黒潮生物研究所で所長を務めた後、「海辺の自然史研究舎」として独立。高知県の沿岸域環境や海洋生物の多様性に関するフィールドワークを20年近く行ってきた。宝石サンゴの保護育成活動にも中心的に関わっており、その生態に詳しい。

宝石サンゴは木の枝のようにも見えるが、実は立派な動物。オス・メスの区別もあり、精子と卵を体外



深海に生きる宝石サンゴの生態は未だベールに包まれたまま…奇跡的な海の自然環境が土佐に宝石サンゴをもたらした

に放出することで繁殖するが、産卵の様子を実際に観察した人はまだいない。産まれた幼生や稚サンゴがどこでどのように成長していくのか、何を食べているのかなど、ほとんどが謎に包まれている。その理由は宝石サンゴが、ダイビングなどで見ることができる造礁サンゴとは異なり、水深100mを超える深い海に生息するため、観察やサンプルの採取が困難だからだ。

そんな中、日本珊瑚商工協同組合、宝石珊瑚保護育成協議会の支援をうけた中地さんらのグループによる増殖実験もあり、今、その謎が少しずつ明らかにされつつある。宝石サンゴの身体は、表面の筋肉や皮、ポリプなどから成る薄い軟体部分と、その内側にある硬い骨軸に分けられるが、宝飾品などの素材となる後者の骨軸の成長スピードは、なんと1年間で0.2mmほど。加工されるサイズになるまで大きいものになると数百年という庞大な時間が必要であり、人工的な増殖活動は困難とされる。一方で、その生命力の強さもわかり、研究者たちを驚かせた。地元漁師などの協力も得て行った増殖実験では、数センチに切り分けて「苗」として放流した宝石サンゴの約99%が、死ぬことなく成長し続けたという。中地さんは、「移植放流によって宝石サンゴの資源を守ることは不可能ではない」と手応えを得ている。

海辺の自然史研究舎
中地シュウさん

そんな希少価値の高い宝石サンゴを育む、世界一の漁場である高知県。高知県沖に流れ込む黒潮が、宝石サンゴの生育に好適な水温範囲や潮の流れ、餌の十分な供給などをもたらしており、その他にも海底の地形や水深、底質の性状といった様々な条件が組み合わさって、奇跡的な環境が成立している。

「生業としてのサンゴ漁を守りながらきちんとした資源管理ができれば、日本が世界に誇る宝石サンゴを未来に残していくことができると思います。そのためにも、生物としての宝石サンゴの特性についてもっと理解を深めていくことが必要です」と語る中地さん。知られざる宝石サンゴの謎に迫る研究は、これからも続く。

職人として功績を残した「土佐珊瑚（サンゴ）の匠」

サンゴの加工技術を伝える牽引役として、65年に渡り日本の技術を広めることに貢献。サンゴの加工技術においては世界一の異名を持つ、サンゴ界のレジェンドの足跡をたどる。

土佐サンゴ工芸の代表的な職人、前川泰山さん。日本国内のみならず、世界の博物館や個人蒐集家から支持されている。作品制作はすべて手作業という職人技。感覚を研ぎ澄ませ、細かいニュアンスをひとつひとつ表現している。

サンゴ工芸の最前線を歩み伝統にとらわれず数々の革新技術をあみだしたサンゴ一筋65年の職人

約65年に渡って、サンゴ工芸の最前線を歩み続けてきた名匠、前川泰山さん。伝統的な常識にとらわれず、自身の内面から湧き上がるイマジネーションを解放した自由なモチーフ展開や、素材としてのサンゴの希少性を考慮し、革新的なサンゴの加工技術を多数考案。また、サンゴを現代的なジュエリーとして提案した先駆者でもあるなど、その功績は計り知れない。

前川さんがサンゴ職人としての一歩を踏み出したのは昭和29年、16歳の時。足に不自由を抱えていたために看板絵師の夢を諦め、当時、高知市の京町にあった「福島珊瑚店」に入社。初めてサンゴを手に取りながら、先輩職人から技を教わった。作っていたのは観光客向けのお土産品や、和装に使われる帯留めなど。一本のサンゴの原木から彫り出す伝統彫り、平面彫りばかりで、モチーフも支那美人や七福神などの縁起物。それが当時のサンゴ職人の常識だった。約10年の修行の後、28歳で独立した前川さんは、その常識を変えることになる。

独立した前川さんはまず、比較的安価で手に入れやすかった白サンゴの色を活かし白馬や乱菊、鷺など、それまではなかったモチーフの額装を発表。これが入札会で話題になり、国内外のバイヤーやコレクターに一目置かれるようになる。今でこそ最上ランクの価格が付けられる赤サンゴも当時は不人気で、「立体感がでにくい」「血を連想する」などと言われていたが、前川さんのモダンなジュエリー作品をきっかけに価値が高まったのだという。革新的なことをするたびに批判やバッシングも受けたが、買い手やファンからの支持によって、今日のスタンダードになっていった。

それは、前川さんがあみだした「寄木」と呼ばれる加工技術も同じ。一本の大きな原木から作品を彫り出すのではなく、別々のサンゴで作品の部位を作って、それらを組み合わせて一つの作品にする技法だが、当時は「一木彫り」というあまりにも堅固な伝統に反するものだった。前川さん自身にも抵抗感はあったと言うが、作品の大きさ、ダイナミックな動きの表現や、ポーズの自然さなど、これによって獲得できる表現は大幅に広がったと、現在では評価されており、何より、素材である宝石サンゴが希少になっていること、成長に膨大な時間がかかること、それによる、国際条約による輸出入の規制の可能性などを考えれば、「一木彫り」の技法は今後続けることはむずかしい。サンゴを大事に扱う、という前川さんの信念の表れでもあった。

2015年には就業60年を記念し、集大成と言える大個展を高知市で開催した前川さん。100点を超える創造性豊かな作品が展示され、自身がサンゴとともに歩んできた創作の軌跡を伝えた。一つひとつのサンゴに向き合う前川さんの真摯な姿勢は、今日も続いている。

「前川珊瑚工房」では現在、4人のお弟子さんとともに、年間100点ほどの作品を制作。バイヤーからの受注生産のサンゴ工芸品を中心に、前川さん自身のライフワークとなっている自由な彫刻表現を追求している。

前川珊瑚工房
高知市東石立町138-5
☎088-832-1535

Tosa Coral memo 2

サンゴの名匠 前川泰山の技!

革新的な「寄木彫り」

それぞれの作品の部位を別々のサンゴで制作し、それらを組み合わせてひとつの作品にするという「寄木彫り」。伝統的な「一木彫り」では難しい自由な表現に到達した。

ユーモア満点なモチーフ!

支那美人や七福神などの縁起物が常識的なモチーフであったサンゴ工芸に対し、前川さんの作品では可愛らしい動物や食べ物なども作品に。赤サンゴを素材にした、ユーモアあふれる実物そっくりの作品「唐辛子」も!

様々な素材と組み合わせ

前川さんの作品では異なるサンゴを組み合わせたり、サンゴを粉末状にして使用したりと多様なサンゴの使い方がなされるが、さらには陶器、和紙、石や木など、様々なサンゴ以外の素材も取り入れられている。まさに、工芸美術品!

「土佐珊瑚（サンゴ）」を未来へつなぐ若手職人

高価な国際的商品として注目を集める土佐のサンゴ。世界最先端のその加工技術を受け継ぎ、未来へと継承する若手職人の熱き志に迫る。

サンゴ業界に新たな風を吹かしたい…

一昨年には、職人歴4年目にして、花と昆虫をあしらった独創的な作品で、コンテスト最優秀賞を受賞、早々に頭角を現す期待の若手。世界に羽ばたく商品を手に、難易度の高い加工に苦闘しながらも、自らの世界観を表現する。「高知の地場産業に携われることが誇り、自分なりに流行を取り入れヒット商品を生み出したい」。世界屈指のサンゴメーカーとして、スーパーブランドからも高評価を得る「KAWAMURA」の看板を背負うだけあり、その意気込みは流石だ。

株式会社KAWAMURA 谷内克臣さん

「第40回土佐さんごまつり名作コンテスト」置物及び額面の部にて、最も栄誉ある知事賞を受賞。目指すはサンゴ業界のスティーブジョブス。

高知市福井町689-25　☎088-872-8000

異素材と組み合わせてサンゴの魅力を強調

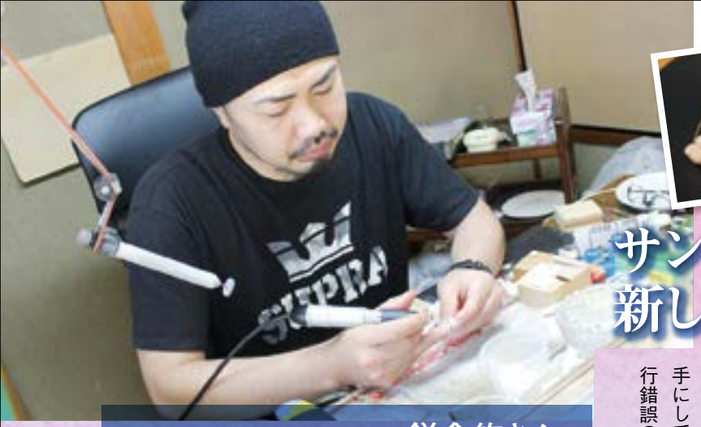
家業のサンゴ加工をしていた森さんが「根付」に出会ったのは10年程前のこと。現在ではすっかり根付作りに没頭し、個展を開くまでに。作品は、サンゴと鹿の角、鯨の歯などを組み合わせた、独創的なものばかりで、著名人からも評価を得る実力の持ち主。現在は定期的に東京のギャラリーに作品を提供しており、国内はもちろん、ロシア人や中国人からも人気が高い。「高知の特産をアピールできる作品をたくさん作っていきたい」と話してくれた。

森謙次さん

美大卒後、奈良の一刀彫り工房で働いていたが、家業のサンゴ加工を継ぐため帰高。根付作りという趣味が高じて今に至る。

HP http://netsuke-sango.com/
E-mail kenjimori1984@yahoo.co.jp

サンゴだけに捉われず新しい見せ方を



サンゴを使った工芸作品をメインに手がける鎌倉さんが作り出すジュエリーは、その経験と技術が生かされた立体的で繊細なデザインのものが特徴。「若い女性にも好まれるものを目指して企画した」という桜をモチーフにしたイヤリングにはダイヤがあしらわれ、多素材との組合せがこれまでのサンゴジュエリーのイメージとは違った印象に。「どんなデザインだと気に入ってもらえるか…」、作品を手にしてくれる人の事を想い試行錯誤の日々を送る。

カマクラサンゴ Gallery蓮Ren 鎌倉悠さん

サンゴを使った工芸彫刻をメインに、ジュエリーなど幅広いジャンルの作品を手がけながら、父と運営するギャラリーの展示企画も行う。

南国市稲生34-3　☎088-865-0744

若い世代へ加工技術を受け継いでいく

宝石サンゴや本真珠、貴石などを取り扱う「(株)木内工芸」は、時間がかかっても一つひとつの商品を丁寧に作成し、妥協しないことをモットーにしている。そこで加工技術を磨く若手職人2名の作品が、今年のコンクールで見事入賞。西本さんの作品は細部まで繊細に施された加工技術、西森さんの作品はデザインと色の調和のセンスの良さが評価された。今後は、若者が気軽に身につけられるようなサンゴジュエリーを作るべく日々邁進中だ。

(株)木内工芸 高知支店 西森恵美さん(左)・西本佳那子さん(右)

元々ものづくりに興味があり、2015年に入社した2人。若い世代ならではの発想を活かした作品を作るため技術を高める毎日。

高知市神田404-1　☎088-832-6888

絶景にて人と出会う

Spot 05

海の神秘が見られる場所

東洋町甲浦湾

高知県の東北端、ちょうど徳島県との県境である東洋町・甲浦湾で、
その海の魅力を世界へ発信するため直向きに潜り続ける1人の水中フォトグラファーがいる。
今、世界からも注目を集める東洋町の海。
その自然とそこで暮らす人々の共存を願い、新たな観光産業に挑んでいる。

「日本近海には４０００種もの魚が生息しているんですが、高知近海ではその半数以上の魚が確認されているんです。これって本当にすごい事なんですよ！」。生き生きとした表情でそう教えてくれたのは、東洋町でダイビングショップを営みながら水中フォトグラファーとして海に潜る福井宣博さん。「高知県東部は西部に比べ観光業が少ないように思われるけど、知られていないだけで魅力は無数に存在する」と町の魅力を教えてくれた。

同じ高知県の海でもその環境や景色は様々で、黒潮が沖を流れる東洋町の海は、水温の高い海域と低い海域のどちらの魚も見られ、雄大なサンゴ礁を眺めながら熱帯魚と一緒に泳ぐことができる。元旦には全国のサーファーが初日の出を拝み、雨上がりの砂浜では空と景色が映し出された神秘的な光景が広がる。運が良ければダイビング中にサメの生態観測もできる。

そんな東洋町の海が昨今の環境の変化により大きく変化しつつある。温暖化や化学製品の流出で海の中のサイクルが乱れ、そこに住む魚の居場所が無くなりつつあるというのだ。そんな状況を危惧し、ダイバー、そしてフォトグラファーとして、水中の様子を撮影し、サンゴの研究者や地元の漁師に海の状態を伝えている福井さん。その活動は多岐に渡り、本来の海のバランスを人の手で取り戻そうとする全国レベルの事業にも参加している。

一方で、東洋町観光振興協会の会長として、この町の自然を活かした観光振興を推進し、県外から観光客を誘致するためのアイデアを模索。「先進国である日本にこの自然が残っていることは本当に貴重なことで世界からも評価されている。その素晴らしさを地元の方にも改めて知ってもらいたい。都会だから、すぐコンビニに行けるから豊かな暮らしだとは思わない。心が豊かになれるこの場所を自分にできる方法で見守っていければ…」。この町の可能性を信じて、大好きな海の魅力を世界に届けている。

地域の自然、文化、人々とそこに眠る観光資源を発見するため…

株式会社オランク 代表取締役
福井 宣博さん

自身が運営するダイビングショップのインストラクターでありながら水中フォトグラファーとしても活躍。2017年に世界的に有名なフォトコンテスト「NATURE'S BEST PHOTOGRAPHY ASIA」にて甲浦湾のサメの生態観測を捉えた写真で受賞。東洋町の名を世界に発信した。

知る人ぞ知る、迫力満点の祭り

百万遍祭（ひゃくまんべんまつり）

●土佐郡土佐町南川地区大谷寺
●7月28日（日）

地元の男性たちが寺内の舞堂でわいわいと大きな数珠を持ってまわり続ける祭り。酒もまわって途中から転ぶ人も続出。近年は見物客も増え、さらに盛り上がりを見せている。

土佐が語り継ぐ祭

古き良き伝統文化を後世に伝えるべく奔走する祭り人達の想いや胸の内にせまる！

地元の底力がここに

四国の中央に位置し、自然豊かという表現がまさにピッタリの土佐町。町内の北側にある南川地区では、毎年夏に「百万遍祭」が行われる。南川の百万遍祭は、いつどのように始まったのか…、地元の人達にすら知られておらず、その起源は謎に包まれたまま。しかし、始まりが分からないほど昔から行われてきて、これまで地元の人達によって守り続けられてきたことは事実だ。祭りは毎年7月の土用入り後、初の日曜の午前0時より、しめ縄作りをとっかかりに幕を明ける。しめ縄を作ったあとは、タラの木で作った大きな数珠を男達が持って、夜明けまでくるくるとまわり続ける「朝繰り」。その後、一旦帰宅してひと休みした後に、午後1時頃より夕方まで舞い続ける「本繰り」。酒を飲みながら繰り続けるので、次第に酔いもまわれば舞堂より転げ落ちる。そんな光景もこの祭りには茶飯事だ。人力仕事ということもあって、女人禁制として代々行われてきた祭りだが、男だけが30名程、賑やかに繰り続ける様子は非常に見応えがあり、最近では、プロアマ問わずカメラマンもたくさん訪れているという。

伝統を守りたい…

南川地区長でこの祭りの主催者である竹政さんは、この「百万遍祭」を後世に残し続けていきたいと胸の内を語る。「この地区出身の者は、祭りに合わせて帰省するし、地元の人たちの拠り所にもなっている。昔から伝わるこの祭りをずっと守っていきたい。地元の年配の方はしんどいと言う人もいるけど、これからどんなに規模を縮小させても続けていきたい」。地域には高齢者が増え、現実、5年、10年先まで続けることが危ぶまれている。そんな一方で、地域支援員や行政の関係者、地域おこし協力隊など若い人たちも祭りに関わり始めている。「今後はこの祭りを若者に知ってもらうためにSNSも活用したい」と竹政さん。未来へ繋ぐための活動は続く。

「百万遍祭」主催者・竹政敬生さん

四万十川の魅力を伝承したい

四万十大正あゆまつり

●四万十町大正「大正新橋」下の川原
●8月18日（日）12時～ ※小雨決行、悪天候の場合は25日（日）に延期

四万十川で採れた天然あゆを使ったグルメコーナーや伝統の火振り漁、花火のほか、景品が当たるクイズ大会などイベント盛り沢山。地元民の熱い想いが込められた夏祭り。

四万十川がある限り！

「この場所で生まれ育ち、幼い頃は川でコロバシ（筒漁）を教えてもらった。そんな時代を生きてきた自分だからこそ四万十川の良さを発信したいと強く思う」この祭りの実行委員長を務める市川さんは、今年で17回目を迎える「あゆまつり」を第1回から主導。祭りの主要イベントである、伝統の「火振り漁」のデモンストレーションまで自身が行う、エネルギッシュな人物。「歴史ある四万十川の文化を伝えたい」という思いから、祭りには地元の魅力をぎゅっと凝縮。「火振り漁」の他にも、「いかだレース」や四万十に、ちなんだクイズ大会など、趣向を凝らしたイベントを企画。飲食ブースでは、地域ならではの調理法や保存食を知ってもらうべく、天然鮎の美味しさを再発見できる多彩なメニューを、地元のお母さん達らが腕を振るう。

地元の人にも伝えたい

「この地域の文化を知ってもらいたい」、そんなひたむきな想いで祭りに携わってきた市川さんだが、自然相手な分、苦労も多いと話す。毎年、鮎が大漁に採れるとは限らず、鮮度の良い鮎を安く提供するのも容易ではない。それでも「美味しい鮎か提供したくない」というこだわりに妥協は許さない。一方で、祭りは天候にも大きく左右される。昨年は、メインイベントとなる「火振り漁」の開始直前まで大雨が続き、その開催が危ぶまれた。しかし、想いが天に通じたのか奇跡的に天候が回復、約2500人もの来場者で祭りは賑わいを見せた。「全国から人が集まることで地元の人も喜んでくれる。この土地の素晴らしさを改めて実感できる場でもあるこの祭りを元気な限り続けて行きたい。そして今後は若い人が引き継いでくれれば…」。来た人だけでなく、ここに住む人も四万十川の魅力を想い起こさせるこの祭りに、自信を持って挑んでいる。

「四万十大正あゆまつり」実行委員長・市川敏英さん

LINE@でも情報配信中！

とさぶし と友達になろう！

（その1）QRコードを読み込み「とさぶし」と友達になる

（その2）記事の閲覧やプレゼント応募、最新情報を受け取れる

若者の感性が生きる 穏やかな海辺のマルシェ 地域のコミュニティーにも

高知県の西部、黒潮町で開催されている「海辺の日曜市」は、幡多地域の生産者や雑貨屋さんが集まるマルシェ。真っ青な太平洋に向かって開けた、入野海岸近くの広場で開催されており、穏やかで陽気な気候特有の、温かい潮風が吹く。開催が始まったのは、今から約10年前。役場に勤めている畦地和也さんが、都会のアースデイのマルシェや、オーガニックマーケットなどに刺激を受け、「自然豊かな幡多の地元でこそ、若い人たちの感性が息づくマルシェを行いたい」と奮起。試験的な催しを何度か行い、それ以来、地域の人々と共に継続してきた。同じく役場に勤めながら事務局を担当する福岡さんは、「出店者や地元のお客さんがつながり、小さな地域経済をまわすようになっていることがうれしい」と話す。移住者やUターン者が始めた自営業の助けにもなっており、地域のコミュニティーとしても機能している。

幡多地域の若い雑貨作家さん。happy dwarfの中岡さん（左）、AOIZの井上さん（右）共に「地元で可愛い雑貨を!」と手作りしている。

最近、宿毛にUターンして、自然にこだわった養鶏業を始めたという「裏庭たまごとハーブ」のお2人。自然豊かな環境での子育てをしたかったという。

地元黒潮町出身の山中さんが営むパン屋さん「PECO」。山中さんは地域を離れていた間も、自然を求めてUターンを決めていたそう。

実行委員会の皆さん。畦地さん（写真中央左）、福岡さん（左端）らを中心に、いよいよ今年の10月で10周年を迎える。

会場近くの入野海岸は、Tシャツアート展などで有名な砂浜美術館も。ただっ広い砂浜が開放的な、心地よいロケーション。

今回、レシピを伝授してくれた「橘川中山間生産組合」のお母さんたち。10世帯ほどの限界集落に住みながら、昔ながらの暮らし方を伝えている。

今回のテーマ
海辺で雑貨マーケット！田舎おこわも♪
summer

日曜日のTOSAレシピ

高知県の西南部、幡多地域の定期市「海辺の日曜市」におでかけ!
充実の雑貨探索を楽しんで黒潮町の田舎料理にも触れよう。

作家さんが多い 海辺の日曜市 幡多地域の自然や文化が ものづくりにも息づく

そんな海辺の日曜市は、陶器やクラフト系の雑貨品を出品する作家さんたちが多いことも特徴のひとつ。黒潮町でガラス工房を営む「kiroroan」の植木さんは夫婦で作品作りに取り組んでおり、海辺の日曜市にも最初期から出店を続けてきた。幡多地域の濃い緑や風の心地よさが、自身の作品にも表れていると言う。シンプルながら味がある焼き物を制作している「日常屋」の清藤さんも、地域に移住して釜を構えた作家さん。幡多地域で盛んな塩づくりの文化に触れて以来、地元のお客さんの声に応えながら、塩壺を焼いている。地域の自然や文化がものづくりにも息づいており、ここでしか作られないものが溢れている。

四万十市で革細工を作り続けている「charm」の松田さん夫妻も、海辺の日曜市に長年出店している。趣味からスタートしたのだとか。

日常屋の塩壺には、洗い土の粘土を用いており、水分が外部に抜けて、内部の塩を良い状態で保存できるように工夫されている。

「日常屋」の清藤さん夫妻。「生活のなかにシンプルで使いやすい焼き物を」という考えのもと、屋号を決めた。

「kiroroan」の植木さん。「心地よいゆるさ」が流れる海辺の日曜市では、長い付き合いになっている地元のお客さんが多いのだとか。

幡多・マーケット

海辺の日曜市

黒潮町の「土佐西南大規模公園 体育館」の横で、毎月第2日曜日、9時から14時まで開催。「風土に根ざした地域産品の創造」や「エコロジカルな地域経済の支援」などを目的に、地域コミュニティーに賑わいを生んでいる。自然からも住民からも感じられる、幡多地域らしい穏やかな雰囲気を感じに、出かけてみては。

☎080-2786-3702
（まちづくりマーケットプロジェクト）

「橘川中山間生産組合」の皆さんの出店では、自ら栽培した野菜のほか、こんにゃくや味噌など、昔ながらの自然な田舎食材を販売している。

2度蒸しがポイント！

橘川山菜おこわ（たちばながわ）

材　料

ぜんまい……100g
たけのこ……50g
わらび……50g
きざみしょうが……少々
鶏肉……50g
もち米……2合
砂糖……少々
自然塩……少々
醤油……少々

手順1 一晩水につけたもち米を、醤油、砂糖、自然塩と一緒に炊き、30分ほど蒸し器で蒸す。

手順2 ぜんまい、たけのこ、わらび、きざみしょうがを、醤油、砂糖、自然塩と一緒に弱火で10分ほど煮る。鶏肉は軽く炒めておく。

手順3 蒸したもち米、ここで味付けした山菜と鶏肉を混ぜて、さらに蒸し器で15分ほど蒸せば完成。

プライムトーク

土佐の文化を受け継ぐ者たち

高知の風土に育まれた「土佐人」たちは
今日もそれぞれの分野から「土佐の風」を発信
そこに新たな文化を重ねながら

Hyotan MAGIC
小泉斉（こいずみ ひとし）さん

【プロフィール】
1971年東京都出身。学生時代、ネパールのゲストハウスのオーナーになるなど様々な経験を重ねる。2011年の東日本大震災をきっかけに2012年高知へ移住。「Hyotan MAGIC」を立ち上げる。

古くより、物入れ、楽器、仮面、御守りなど、世界中でいろいろな用途に用いられてきたひょうたん。「最古の栽培植物」とも言われており、種類や形、大きさは実にさまざま。そんなひょうたんに魅せられ、人生をかけて向き合っている一人の職人の物語。

2つと同じものがない 唯一無二のひょうたんランプ

一度見たら忘れられない。それほどまでに美しい「Hyotan MAGIC」のひょうたんランプ。ひょうたんの大きさ、形、そこに描かれるデザインは2つと同じものがなく、オンリーワンの特別感も心を惹きつけられる要素のひとつ。これら全てを手がけているのが、小泉斉さん。四万十市在住のひょうたんランプ職人で、自宅の工房には作りかけのランプやそれに使う道具、材料がそこかしこに溢れていた。素材となるひょうたんは自らの手で、しかも無農薬で育てているというから驚きだ。「長らく使っていない畑を友人から借りて、今から4年ほど前より本格的にひょうたんの自家栽培を始めました。土地を汚したくないという想いから、無農薬にこだわってます」。そんな小泉さん、実は生まれは東京で、今から約7年前に四万十市へ移住。現在はひょうたんランプ職人として活動しているが、これまで生きてきた中で2回、人生観を大きく変えられる出来事に直面したという。そのひとつが学生の頃に訪れたネパールでの体験。「日本と比べてあまりの貧困の差にショックを受けて、自分も何かできないかと模索しました」。

もう一つの大きな出来事 高知への移住

その結果たどり着いた答えがネパールでゲストハウスの経営。日本にいながらオーナーとして出資を続け、たまにネパールを行き来するような生活が約4年続いた。「正直一銭も儲けなかったけど（笑）、後悔はしてません。今でもネパールは僕の中でとても大切な場所です」。またちょうどその頃からひょうたんランプ制作も本格的に手がけるように。ひょうたんとの出会いは学生時代に知人宅で見たひょうたんスピーカーに心奪われたことに始まるが、ひょうたんランプに辿りついたのは些細なきっかけだった。「ゲストハウスのオーナーをやめて日本でカフェの店長をしていた時、店内に飾ってあった自作のひょうたんスピーカーを見たお客さんからランプも作ってみたら？　と言われて。それから制作するようになりました」。そんな生活が長らく続いて久しくなった頃、もう一つの大きな出来事が起こる。2011年東日本大震災。「人生観が変わったと同時に、一度きりの人生を後悔したくないと強く思いました」。そしてその夏、東京での生活や今後のことを悩んでいたこともあり、気晴らしにと訪れたのが四万十市だった。「五感で感じる全てのものがしっくりきて、ひょうたんランプを作るならここだと直感しました」。

収穫されたばかりのひょうたん。畑の向こうはすぐ海で、大自然に面した場所で無農薬でのびのびと育てられている。

自宅の工房にて、下描きをしたひょうたんに機械で模様を入れていく作業。桐やドリルなどを使い分けながら慎重に。

灯りを灯しても灯さずとも、この美しさは格別。緻密な模様と、そこに施されたガラスやビーズの装飾は2つと同じものが無い。

ここでしか作れないもの 自分にしか作れないもの

そうして震災の翌年、2012年に四万十市へやって来た小泉さん。これまでは別の仕事をしながら趣味でひょうたんランプを作ってきたが、今後は生きていくための仕事にするとの決意を胸に。「高知に来てから少し作風が変わったかもしれません。波のような模様や、水のような色、それとなく自然をイメージするようなデザインが増えましたね」。そんな高知エッセンスが加えられたひょうたんランプは、県内で行われるイベントに参加すれば写真を撮る人があとを絶たず、またワークショップを開けばひとたび満員御礼と、人気と認知は着実に広がっている。ひょうたんランプを高知に根付かせ、材料となるひょうたんも自らの手で作るという「メイドイン高知」へのこだわりは今後も変わらない。「まずは四万十産の綺麗なひょうたんを作ること。そしてそのひょうたんそのものを販売したり、四万十産のひょうたんランプキットを作ってみたり、ここにしかないもので、僕にしかできないことを続けていきたいと思います。そしていつかはネパールにひょうたんランプファクトリーを造る！　これが僕の夢なんです」。

FM高知で毎週金曜放送中のラジオ「プライムトーク」に出演した際のスタジオの様子。小泉さんの出演回は6/28、7/5の2週に渡ってオンエア。

おばちゃん達の地元愛と人情が溢れる町

大学生がゆく〜 集落を訪ねて

美しい山々が連なる津野町。ここには、地元の人たちの楽しそうな声が聞こえてくる集落活動センター「奥四万十の郷」がある。この施設の中でひときわ賑わいを見せているのは「農家食堂ｃａｆｅイチョウノキ」。土・日・祝のみの営業だが、ひと月に４５０人程が訪れるほどの人気ぶり。地元のおばちゃん達が作る「田舎のランチ」は、町内の山菜などを使用していて絶品だ。「ここで働いている私達が月に1度、交代で店長になったり、自分達も楽しみながら働けるような仕組みにしています」と微笑むおばちゃん達に、「年配の方だけではなく、若者がもっと来てくれるような居場所にしていきたい。町内外の人々に愛されるような場所にするには、まずはお母さん方の温かい人情に触れて欲しい。お母さん方の頑張りがあってこそ成り立ってきたから」と語る運営管理の嶋本さん。そんな地元愛と人情に触れた岡さん、田舎料理にお腹もほっこり満たされた。

地元の人たちが協力し合って活性化を目指す町を発見!

高知大学地域協働学部
岡 知佳さん

徳島県出身。県内の様々な集活センターを訪れるなど、フィールドワークを中心に活動する日々。持ち前の愛嬌と笑顔で集落を訪れると、地元の方々とたちまち仲良しに。

集落活動センター「奥四万十の郷」

高岡郡津野町芳生野乙810
☎0889-43-9155

今年で4年目を迎える集落活動センター。地元民による絵手紙教室やコンサートも定期的に開催する他、同窓会の会場としても活用されているなど、地元の方々の拠りどころとなっている。最近は、四万十川裏源流を楽しむ、食事付きの「散策ガイド」などにも注力。また、集活センターとカフェを次の世代へどう残して継承していくか、今後の課題に向け試行錯誤を続けている。

敷地内には、大きなイチョウの木が佇み、カフェではほっこり休憩。「居心地がとっても良くて、地元の方々に愛されている空間というのが伝わってくる。また必ず来たい!」と岡さんも大満足♪

郷地区集落支援員・郷地区長
嶋本隆男さん

読者プレゼント

とさぶしからの贈り物

たくさんの応募お待ちしています。

クイズとアンケートに答えて応募してや!

クイズ 日本における宝石サンゴの発祥の地はどこ?

「とさぶし」からの贈り物

応募締切 2019年9月20日

- 読者プレゼントの応募は、1人1回とさせていただきます。
- プレゼントの発表は、商品の発送をもって代えさせていただきます。
- いただきました個人情報はプレゼントの発送のみに使用します。

4

株式会社KAWAMURA
深海サンゴの根付
10名様

深海サンゴをサクラの花のモチーフに加工した根付。キーホルダーやストラップとしても人気が高くお土産にも重宝される可愛らしい商品。

2

カマクラサンゴ Gallery蓮Ren
イヤリング
1名様

スカッチサンゴを使用し、花をモチーフにして作られた華奢なイヤリング。華やかさも兼ね備えた様々なシーンで使いやすいデザイン。

1

宝石珊瑚資料館35の杜
地中海サンゴのペンダント
1名様

地中海で採れる赤サンゴを上品にあしらい、クローバーのモチーフで可愛らしく仕上げられたペンダント。年齢を問わず女性らしさを引き立たせてくれる。

5

森謙次さん
子イカストラップ
2名様

白サンゴを使用した子イカがとっても愛らしいストラップ。イカの形や模様が繊細に再現されていて、見ているだけでも飽きのこない、手の込んだ作品。

3

(株)木内工芸
血赤サンゴのピアス
3名様

土佐沖で獲れる血赤サンゴを使用。身につけているとパッと目を引く美しい赤色が特徴。ゆらゆら揺れる可愛らしいデザインが乙女心をくすぐる。

とさぶしLINE@と友達なって、読者プレゼントに応募しよう!

❶スマホから左のQRコードを読み込んで、とさぶしLINE@と友達になる
❷とさぶしLINE@より「とさぶしからの贈り物」応募フォームが届く
❸応募フォームより、必要事項を明記し、読者プレゼントに応募する

※読者プレゼントの応募は「とさぶしLINE@」への登録もしくは、官製ハガキから応募できます。官製ハガキで応募される場合はお名前・発送先のご住所・お電話番号・ご希望のプレゼント番号・クイズの回答をご記入の上、下記の宛先まで締切日(2019年9月20日)必着でお送りください。 〒780-0081 高知市北川添10-15 株式会社ほっとこうち

A BRAND NEW CHAPTER @KOCHI
TOSABUSHI
とさぶし

Webリニューアル！見てちや！

https://tosabushi.com

facebookもやってます！
https ://www.facebook.com/tosabushi

発行
高知県文化生活スポーツ部文化振興課

〒780-8570 高知市丸ノ内1丁目2番20号（本庁舎5階）
Tel 088-823-9793　Fax 088-823-9296
E-mail 140201@ken.pref.kochi.lg.jp
発行日：2019年6月30日（季刊）

企画　とさぶし編集委員会
制作　ほっとこうち

バックナンバーの入手方法

お近くに配布先がない場合は、送料分の切手を送っていただくと、
受け取り次第、発送をいたします。

【送料】
1冊・2冊　180円
3冊　215円
4冊・5冊　300円

6冊以上の場合は、一度ご連絡ください。

お問い合わせ・送付先は、
高知県文化生活スポーツ部文化振興課（上記）まで。

このパンフレットは宝くじの収益金の一部で
作成しています。

LINE@でも情報配信中！

とさぶし
と友達になろう！